



IDF PRESS RELEASE

Brussels, 10 September 2018

IDFプレスリリース

2018年9月10日、ブリュッセル発

コーデックスとIDFの強い協力関係が食品安全を保証する Strong collaboration between Codex Alimentarius and IDF to ensure food safety

コーデックス事務局の Tom Heilandt 氏は、2018年10月17日、韓国はテジョンで開催予定の IDF ワールドデーリーサミット2018テジョンでコーデックスと国際酪農連盟 (IDF) の強い協力関係が重要であると強調する予定である。同氏は、コーデックスのスタンダード (規格) 設定手続きにおける IDF の特別待遇と、食品安全を促進する2つの重要な国際組織が目標を共有している点を強調する予定である。

「コーデックスと IDF の協力から生まれた成果についてその大要を述べ、全ての家庭に安全で良質な食品を届けることにより、持続可能な将来に向けて一層緊密に協働する方法を考える予定です。」と Heilandt 氏は語った。

キャロライン・エモンド IDF 事務総長は、この特別講演会は、乳製品の食品安全について、その重要な側面の情報を共有する活動に有益な基盤を提供します、と述べた。

「コーデックス事務局長から食品安全スタンダード (規格) の持論を述べていただくことになり光栄です。参加者も貴重な経験をえられると思います。」とエモンド氏は述べた。「酪農乳業を益する科学的な知見の進展について、国内および国際的な経験を共有することで食品安全の専門家から学ぶ点は多いと思います。」

食品安全分析に対する毒物学研究の進展と化学的なリスク評価における課題が、ニュージーランドはフォンテラ社研究開発センターの Justin Bendall 氏による講演の焦点となる。同氏は、ヒトの健康に関連する毒物学研究を応用することの重要性について講演

する予定である。

「研究者が食品中の新しい汚染物質または潜在的に新しい毒物を発見すると、危害を及ぼすと受け止められた化学物質を管理することにより規制当局は市民の懸念に応えます。」と **Bendall** 氏は語った。

「食品の安全性と品質は、つねに適切な科学に基づくリスク評価に基づかなければなりません。しかし規制的な管理の指針を作成するうえで、利用できる毒物学の情報は何十年も古いか、品質が低いか、あるいは、食べ物全体と一緒に毒性を中和するヒトの総合的な代謝系統に基づかず、独立した化学物質と見る還元主義に基づくかもしれません。そのような情報はヒトの健康にはその適切性や価値が疑わしいが、その一方でより良いアプローチが利用できるようになっています。」と説明した。

Bendall 氏は1つの危害物質を独立して極小化する試行の流れでは、ヒトの健康に対する重要性は不確かで、意図しない結末が必然的に発生すると述べた。そうなれば個々人の栄養学状態と健康状態に悪影響を与える恐れがあり、この状況では公衆全体が健康にも悪影響がでるでしょうと言明した。

この特別講演会で討論されるもう一つの議題は、多くの規制化合物、多様なマトリックス、最大残留基準値 (MRL) の世界的な違いに起因する食品管理である。動物医薬品残留物のスクリーニングと同定が課題となる。スイスはローザンヌのネスレー社研究所の **Erik Konings** 氏がこの問題を綿密に検討する予定である。

「抗生剤、駆虫薬、抗炎症の治療から生じる動物用医薬品残留物のより進歩した試験法は、液体クロマトグラフィー質量分析 (LC-MS) の分野で開発されています。」と **Konings** 氏は述べた。「高感度、高精度の分析方法の開発において、LC-MSは極めて重要な役割を演じます。この技術は、経済的な費用で消費者を適切に守ることを保証します。」

Konings 氏は、牛乳中の動物用医薬品残留物質のMRLについて、コーデックス、カナダ、中国、米国およびEUの規制の枠組みについてその大要を述べる予定である。同氏は、AOAC、ISOおよびIDFによる合作から、既に確立されたMRLをつかった動物用医薬品残留物のスクリーニングと同定について、その手法一式が生まれた点を強調する予定である。

キャンベラ大学の **Andrew Bartholomaeus** 氏は、ナノテクノロジーと乳製品の安全性

について講演する予定である。

「乳製品は人間の母乳と同じく、ナノ構造の粒子材料を自然と備えています。」と **Bartholomaeus** 氏は述べた。「同様に、食品中の工学的なナノ構造は、アイスクリームのように、数百年に渡る食品加工の一面です。あらゆる材料はナノメートルサイズの構造を持っています。ナノ材料が喫食される最終の食品中で微粒子状物質であり続けられれば、少なくとも薬物動態が理論的に変化した可能性があります。しからば、より大きな精査が求められるわけです。微粒子の大きさだけが危害物質の指標では全くありません。大きさではなく、新規性が懸念材料となる可能性があるということです。」

微生物学的衛生常設委員会副委員長の **Francois Bourdichon** 氏は、最近発生した、南アフリカにおける惣菜の肉やEUにおける冷凍とうもろこし、野菜を汚染したリステリア・モノサイトゲネス事故の教訓を検証する予定である。

「この細菌は時折、乳製品と関連して取り上げられるが、リステリア菌は肉と野菜を汚染させる可能性もあります。したがって、食品安全を確保するには、予防手段のほうにより大きな注意を払う必要があります。」と **Bourdichon** 氏は述べた。

「薬剤耐性（AMR）の拡散を防ぐために、抗生剤による治療の必要性を減らすことが大切です。乳および乳製品の衛生規範に関するコーデックス規則がありますが、この規則に準拠する現行の適正規範は、その他の食品業界のお手本としても活用できます。」と、同氏は附言した。

その他には、日本の農林水産省の山田友紀子氏、韓国は湖西大学の **Sang-Hee Jeong** 教授、韓国は **ChunLab** の **Byoung-Yong Kim** 氏、中国は君乐宝乳業の **Hong Zhu** 氏、アイルランドは **Teagasc** の **Olivia McAuliffe** 氏および韓国は車医科大学の **Jang-Hyuk Anh** 教授が講演する予定である。

IDFワールドデリーサミット2018レジジョンの詳細は [IDFウェブサイト](#) から入手できる。

完

翻訳：JIDF事務局

编者注: 仮訳の正確性、完全性、有用性等についてはいかなる保証をするものではありません。参考資料として扱い、内容に疑義が生じた場合は英文の原文をご確認ください。